

# 白金藪

10月号



平成 28 年 10 月発行

第 68 号

白金葭定例会案内

十一月十八日（金）ア第四会議室兼題…神無月、沢庵漬

＊（次号は増田悦子さん追悼号。巻末お知らせ参照）

十二月十六日（金）ア同右、第五兼題…枯野、炬燵

一月二十（金）ア同右 兼題…新年一般

兼題句参考句（十一月十八日分 神無月、沢庵漬）

地蔵まだまつりの衣裳神無月

清水の舞台から見る神無月

玄関に傘集まつて神無月

腰折れの釘なため打つ神無月

赤ちゃんに心うまれる神無月

バス停に小座布団あり神の留守

沢庵の重石に足され鉄鉦鈴

漬物桶に塩ふれと母は産んだか

笑っても沢庵漬けは噛み切れぬ

沢庵に塩のひかりをふりにけり

五百樽の沢庵漬け売る大根祭

沢庵漬ける父祖伝来の石のせて

沢庵の桶に去年の石を置く

片野祥

大口元通

下山光子

三苦知夫

池田ひかり

吉岡桂六

土屋秀穂

尾崎放哉

坂田直彦

藤田満

室伏やすし

武田日出夫

稲野博明

月例会会報（<sup>16</sup>／10／21 10名 行く秋、栗）

飯田孝三

大にきび面の誰彼栗の毬

ハイジの爺ちゃん戻る谷紅葉

郁子の実の色づくかたへ立ち話

行く秋の道路工事の朱色標錐 カラーコーン

大仏はなべて撫肩秋深む

増田陽一

何か訣れありしと思ひ秋は行く

夜の帰宅穴惑ふ蟻踏まぬやう

骨壺にこほろぎの問続くなり

天蚕の羽化に目覚めて栗林

それぞれのシベリア持ちて小鳥散る

光成高志

此秋の行くや臥床の窓の雲

落花生の野ぼつち並ぶ谷津田かな

稲刈機狭心症か田に放置

更待月LEDの町眠る

あちこちに毬かためあり栗林

光  
みち

ゆく秋の夕暮れの風衿あしに  
弟の亡くて届かぬ栗便り  
単線の鉄路の錆や曼珠沙華  
秋深む来し方をまた行く末を

倉田紀子

昼からの大切な時間栗を剥ぐ

行秋の目薬類に零れけり

運動会兎は小屋に亀は池

栗を剥ぐ後ろ姿はまるで猿

病院出てバス停までの秋日傘

松村幸一

蟋蟀に夜は長々し古墳口  
行く秋や埴輪の馬の耳欠ける  
栗の飯泊りと決めし母の家  
黄落や古墳の扉錆しまま  
貝塚の崩るる墳や秋の声

浅野正美

栗ばかり拾ふ悪い子栗御飯

ゆく秋の翡翠飛ぶを忘れをり

妻ばかり病ませて仰ぐ十三夜

湯気まとふ栗をほとけの弟へ

ゆく秋のいよいよ滝の餌かな

吉羽多美子

栗もらひお返し作る渋皮煮  
行秋やパンザマストの曲ながる  
柿を取る高枝鉄腕のぼし  
行秋やそろそろ一人鍋出番  
いが爆ぜて並ぶ栗の実つやつやと

武者昭七

秋晴れや亀の顔出す心字池

亡き人の面影見えて孟蘭盆会

草分けて足で拾ふや栗の秋

木道の先きの先まで秋薊

百日紅の紅の散り敷く木下道

かまきりと眼が合つて貌見つめあふ

あだし栗わが世の果てに一人食む

行く秋やふるさとの日々遠くなり

藪の中艶めく栗を拾ひけり

行く秋や沼辺に白鳥スワン微睡みぬ

秋深し飛行機雲の薄れゆく

栗飯を頬張る少年尿ばり立つ

峠にてすすきを見ている出来心

針箱に針を探すや台風圏

手拭が蚊除けの一枚端寝する

音立てて餌食う金魚や秋の風

### 磯目健二

### 青木啓泰

選句結果(数字は入選数 左添書きは添削句)

4 骨壺にこほろぎの間続くなり

4 廃線の鉄路の錆や曼珠沙華

4 単線の鉄路の錆や曼珠沙華

3 秋深し飛行機雲の薄れゆく

3 草分けて足で拾ふや栗の秋

3 栗の飯泊りと決めし母の家

3 母の家に泊りと決めし栗の飯

3 此秋の行くや臥床の窓の雲

3 妻ばかり病ませて仰ぐ十三夜

3 大仏はなべて撫肩秋深む

3 かまきりと眼が合つて貌見つめあふ

3 かまきりと眼が合つて貌見つめられ

3 病院出てバス停までの秋日傘

3 昼からの大切な時間栗を剥ぐ

2 ゆく秋の夕暮れの風鈴あしに

2 行く秋や沼辺に白鳥微睡みぬ

2 行く秋や沼辺に白鳥スワン微睡みぬ

2 行く秋や埴輪の馬の耳欠けり

2 行く秋や埴輪の馬の耳欠ける

2 弟の亡くて届かぬ栗便り

2 木道の先きの先まで秋薊

陽一

多美子

健二

昭七

紀子

高志

幸一

孝三

昭七

みち

〃

多美子

健二

紀子

多美子

昭七

多美子

昭七

多美子

昭七



秋が深まると世の中が静まってきたやがて迎える冬を意識するようになる。その一日ふと見上げた空に飛行機雲の尾を引いて機影が進む。澄んだ高空を。また仰ぐとさっきの飛行機雲は薄れている。やがて翳雲に化し最後はばらけて消えてゆく。晩秋の飛行機雲は物悲しいものではなからうか。西空にそれを仰いだ時は、その感を深くする、私は。

### 行く秋や沼辺に白鳥スワン微睡みぬ

健二

手賀沼周辺に瘤白鳥が棲みついている。五十羽近くいるらしい。私の散歩道の沼下の手賀川にも彼岸此岸にそれぞれ十羽近く坐っている。普段は微睡んでいるごとくである。行く秋の感慨は白鳥の白の蹲る姿に呼び起される。健二さんの両句とも物に季感を託している。ので私にはよく伝わる佳句と思います。

### 行く秋や埴輪の馬の耳欠ける

紀子

これも行く秋の感慨を耳が欠けている埴輪の馬に託した。房総風土記の丘での囁目吟とか、あそこは古墳群があつてマンモス象の骨格が展示されていたり、房総の古農家が移築されていたり、行く秋やと上五に出されると納得できる丘の佇まいです。

### 骨壺にこほろぎの問続くなり

陽一

故人の骨壺は室内に安置され、屋外の蟋蟀の鳴く音がそこに問いかけてくくる。いつまでも続く問いか

けのようにちちろが鳴く。己がちちろか故人がちちろか、いや壺には悦子夫人の魂があるのだ。

### かまきりと眼が合つて貌見つめあふ

昭七

添削の論が多かつた句。作者はかまきりになつたつもりで己を見つめ、作者はかまきりの眼をみて驚いている。それが作意であると聞いたので原句のままを鑑賞する。みちさんのあげた「蠮螋の両眼貌にをさまらず（土生重次）の句、他に「挑みろし青蠮螋の眼なりけり（石塚友二）」「眼を拭ふ蠮螋鎌を舐め舐めて（平野ひろし）」がある。三句とも味わうべき佳句。掲句は蠮螋も見つめていると想像しての句。ここがいいか悪いか判断の分かれ目だ。「いいおほせて何かある」の解釈を先月したばかり。客観描写に徹して他は省略した方が長い時間に耐える句になるのではないだろうか。

### 一句鑑賞

光みち

### 柿を取る高枝鉋腕のぼし

正美

古木ながらも毎年食べきれぬほど柿が実をつけたのでしよう。ひと昔前なら竿の先に切れ目を入れそこに挟んで取っていたが、今では高枝鉋という便利なものが売られているようです。人の腕となり指となり自在に取れる道具ですね。手長猿のように人の腕が延長したように高枝鉋が伸びていく情景がわかる。ユーモラ

スで楽しい生活の一齣です。竿の先神経凝らし柿を挽ぐ（誓子）こんな句をみつけました。

一句鑑賞

飯田孝三

骨壺にこほろぎの問続くなり

陽一

納骨までの間、仏間に骨壺を安置し、日毎に冥福を祈る。葬儀一切を終え、まわりが静まる宵などは残されて、蟋蟀の鳴く音がことさら身にしみる。「問」が句の要。紛れなき「こほろぎ」の音に幾星霜連れ添った悦子さんに語りかける思いが重なる。終辞、続き「なり」ならぬ続く「なり」が、ひたすら故人を惜しむ心情の深さを告げる。

病院出てバス停までの秋日傘

みち

病人に付き添っても家にいても心休まる暇はない。「病院出て」帰途、「バス停」に向かうほんの束の間、ふとわれに返る。そして明日がまた待っている。結「秋日傘」は即ちそんな寧日なき心理の表象である。く「まで」の情懷が句のいのち。日傘かざす秋の日ざしは、退院も間近いほっとした気持ちを感じさせよう。

あちこちに毬かためあり栗林

高志

近頃は観光農園ばかり、各種の果物狩りで客を呼ぶ。句の情景に野暮な説明は要らぬだろう。週末祝日の家族連れによる栗林の賑わいが手に取れて面白い。落栗

を拾ったり、毬を剥いだり、焼栗の屋台も出てるかも。そして休明けのこの静けさ。さてころは、当世風刺それとも感服か、いわず読者に任せて知らんぷり。「あり」の切れ味が見物。

湯気まとふ栗をほとけの弟へ

幸一

最近、弟さんを亡くされたのである。幸一さんは九十歳を超えて豊饒。きつとお齡は近かったのでは。一緒に過ごされた幼児のあれこれや各々が辿った日月を目に浮かべる。茹栗の湯気の奥に、過ぎしはらからの団居が見えてくる、母がいる父がいる。「まとふ」はつまり肉親の情けの温もり。弟に「に」ならぬ「へ」が幽明の隔たりを伝えて切ない。

藪の中艶めく栗を拾ひけり

健二

「藪の中」といえば芥川の名作、京マチ子主演の往年の名画を思う。官能の窺く「艶めく」が句のさわり、「めく」がちよっときついかな。結「けり」はむしろ「ける」、「たる」だろうか。一句の主体は詠者たる健二さんの「行為」、詠み方はそれぞれだが、仮に落栗の「艶」に感興を絞るなら、客観「藪の中たまさか拾ひ栗の艶」などもあるかも。

一句鑑賞

武者昭七

此秋の行くや臥床の窓の雲

高志

## 稲刈機狭心症か田に放置

「臥床」は寝るところ、寝床のこと。窓から雲が見えるというからおそらく洋室のベッドであろう。作者は最近入院治療の経験をされたからそれが背景かと想像する。「この秋」とわざわざ限定したのは今年の秋になにか期するものがあつたからであろう。それが病のために潰えた悔しさとむなしさとが「行くや」までの冒頭句ににじみ出ている。行く秋は寂しいものだけれど「この秋」は寂しさが一段と身にしみるのである。

「この秋はなんで年よる・・」という名句を思い出した。二句目。一転してなんとも明るくあつてからかんとした句である。田んぼに置き去りにされた稲刈機に作者自身の病んだ姿を重ねて苦笑いというところか。もちろん作者は「放置」なんかされてはいない。やさしい奥方がちゃんと倉庫に格納してくださる。

## 妻ばかり病ませて仰ぐ十三夜

幸一

ともに過ごしながら自分は元気で妻ばかり病んでいくこの不条理。もちろん妻が病むのは作者のせいではない。せいではないけれどやはり後ろめたさを感じてしまうのが長年連れ添ったもの同士のきもちというものであろう。

## あだし栗わが世の果てに一人食む

健二

「あだし栗」は実のない栗。実無栗を「一人食む」

とは老いの身のさびし（失礼！）さの表現であろう。「わが世の果て」などとおつしやらずにもうすこしお邪魔することにしませう。栗は縄文人の命をささえためでたい樹のようです。

## 秋深む来し方をまた行く末を

多美子

秋はいくつになってももの思わせる季節のようだ。まして年を重ねてきたものには若者とは違った思いがある。さまざまのことのあつた来し方を想い、また行く末をあれこれとおもいめぐらせるのである。

## 俳窓評論纂

\*2009年12月号NHK俳句に冬の星の句を小川軽舟氏が選んで載せている。芭蕉、太祇、一茶そして山口誓子の順に並んでいる。誓子先生の句は二句採っている。

夜を帰る枯野や北斗鉾立ちに

おほわたへ座うつりしたり枯野星

以下有名人の句が並べてあるが、冬の星をともに詠んだ句はない。皆地上のものと取り合わせている。

誓子先生の句に敵う句はないということだ。少年期を樺太に過ごされた印象が万葉調の雄渾な調べで詠まれている。星恋という句集もある。「おほわたへ」の句は私が高三の春出会った句であつた。その時の教科書へ



書いたメモに「大海へ星座がすでにうつりしている前にその星座を見ていたことがわかる。そして今は完了したのだ。驚きを含む（〜してしまったよ。）」枯野星は冬の星。」結構気の利いたことを書いているが、それだけで、その句の下にあつた龍安寺の石庭の写真に魅かれたのをかすかに記憶している。

＊2014年3月号の「小熊座」を読んだ。陽一さんからもらっていたもの。当月佳作抄はムツオ主宰の選。はみ出せるティッシュ雪嶺のかたち

着ぶくれやメトロは神田川の下

枯蘆の中に立ちたる初詣

墓はみな頭のみ出て出羽吹雪く

ペースメーカー・オストメイトも年を越す

右の3句はムツオさんの選評が随分後ろに載っている。陽一さんの句は評はないが、評を拒んでいるような生活感と発見がある。芸術家の眼に脱帽して主宰も

敬遠されたようだ。枯蘆の句は実際こういうことを私もした覚えがある。枯蘆原青年の来るところならず（誓子）があるから私は枯葦原の中に入って行つた。結構明るく暖かくて真上に空が在つていいところであつた。墓はみな句、私はと又書いて恐縮ですが、米沢の某寺で見た箱型の墓石がこういう状態であつた。墓碑銘が辛うじて読めて、なんと赤穂事件で討死にした藩士

が多かつた。片方だけから歴史はみてはいけな思つた覚えがある。最後の渡邊さんは今も御存命であらうか。秋元不死男に似たような句があつた。

＊季刊農民文学No.311を磯目健二さんから貰つた。氏とは源氏物語の講座を並んで受けているついこの間知り合つた方だ。同季刊雑誌は80頁二段組の全国誌である。中に磯目さんの遠山あきの追悼文が載っている。一寸私に言われたように、50歳まで普通の主婦をされそれから「書く女」の本領を発揮されて次々と作品を発表され農民文学賞を64歳で受賞され以後死ぬまで仲間を作り新しい作品を創作され続けた。書く女としては樋口一葉と同じであるとか。遠山あきの父は俊才であつて後教職に着いた時、千葉師範付属小の校長職であつた手塚岸衛の「自由教育」に影響を受け、その教育を受けていた恒松恭助に見いだされた。人生の師は父であり、文学の師は恒松先生であるという。父が校長の小学校に通つてその三年生の時島田先生に邂逅し、北原白秋、野口雨情、西条八十、鈴木三重吉など「赤い鳥」の作家の童謡を読んで感想文を書く授業が文学の楽しさを知つたきつかけである。私の場合は壺井栄の「二十四の瞳」がそうであつたが、これも70歳の時また読んでみてがっかりした。いつまでも感動は続くものではないようだ。ここは蛇足であるが、とにかく、

かなり詳細に故人の人生を書いて追悼しているのだが、一気に読める文章を書かれたる磯目さんは只者ではないと思った。今月の出句を見ればそれがわかる。

\*H28<sup>10</sup>朝日俳壇歌壇の真中のエッセイに清水哲男の「ネット歳時記」を終えてが載った。歳時記の例句がつまらんとて自分の歳時記を作ろうと自選した句を一日一句のペースで発表して20年経ち終えた。例句数は七三〇〇句。本ではなく、ITに掲載されたので知る人ぞ知るけれども、感想も手軽に投稿できるし、鑑賞文とともに日々あざなわれる如く増殖する歳時記とした。初期に成田ちるさんの句が載ったりした事もあって、私は当初から注目し時々感想文を送ったりした。今の俳句歳時記の例句は玉石混交であり、総じて不満であるという氏の感想は同感である。疾うに飯田孝三さんが仰っておられたことだ。いずれ本になるであらうが、二三紹介しておきます。

落栗をよべ栗の木を今朝見たり

栗飯に間に合はざりし栗一つ

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

清水哲男氏は芭蕉の言う甘味すなわち小説的興趣のある句が好きようだ。

\*木戸敦子さんの喜怒哀楽<sup>10</sup>が来た。菜根譚<sup>14</sup>の下段「心地、乾淨にして、方<sup>は</sup>じめて書を読み、古を学ぶ

べし。…」は同感。最近それがようやくわかった。無心に読むことが楽しくならなければ文章を読んでいると言えないのだと。他に、岩田桂氏のエッセイはセンチメンタリズムが横溢したもので逆にユーモアが出てくるのが面白い。

お便り広場（到着順、敬称略）

<sup>15,000</sup>は今年の会費のつもりです。適当に御使用ください。私の妹の夫（昭和元年生れ）は三年前、光成さんと同じ病で救急車で入院、3週間より少し早めに退院しました。カイゴ4でした。自宅で転んでも起き上がる事ができてカイゴの人に教わってできるようになりました。今は要支援1になり食欲がさかんです。昨年兄弟6人で箱根へ今年は鬼怒川へ一泊で行きました。はじめて外出したときは、電車にもれずデパートのエスカレーターにもれなかったのですがすぐなれました。杖はついていて歩き方はおそいのですがまあまあ元気でいます。とにかくゆっくり休んで下さい。みちさんも手抜きをしてとにかくできるだけのんびりして下さい。病院にいた間は自宅におられるときはとにかく休むやうにして下さい。

（<sup>915</sup> 小山陽也揮）  
白金霞九月号と写真頂きました。ありがたいのですが、あまりムリをなさらないで下さい。この雑誌一冊

つくる事は大変です。みちさんもゆつくりして下さい。白金葭も頁数をへらして手間を省いて下さい。とにかくお二人ともゆつくり休んで下さい。そして大いに食べて下さい。どうもありがたうございました。(917陽也)

前略 無事ご退院の由まずはお目出とうございます。あとはゆつくり静養して早く日頃の元氣(いつも感心しています)をとり戻して下さい。白金葭9月号も拝受しました。編集は細かい神経を使う仕事でしょうからどうか無理をしないで下さい。九月の句会が流れたのは残念ですが、来月を楽しみにしています。(小生も冠動脈にステントを詰めています。十年前からですが無事に過しています。)みち様ともども健勝を祈ります。

(917 武者昭七)

前略 健三兄から聞きおどろきました。家族の皆様もさぞ心配されたことと思います。平素から人一倍壮健で毎日忙しくされていたこと、ご病中のお気持は格別お苦しいことと推察します。ご家族の皆様のご心痛一入でございましょう。少しゆつくり休みなさいと神様がそうさせたのだと思つてどうぞ無理をしないでゆつくりして下さいね。無理をしなれば徐々に回復できると信じています。もうこれ以上兄弟が欠けるのはさみしいです。私の尊敬する兄はまだ長生きしてほしいです。お見舞いに参上いたしたくても遠方のことで

思いにまかせずとりあえずお見舞いまで。(917峯子)

初秋らしくない悪天候が続いております。白金葭九月号を拝見してびつくりしました。お元氣一杯の方が心筋梗塞とは・・・早期に判明入院治療なさいました由ほんとうに幸いでいらつしやったと思います。私の母はバカ医者のおかげで急逝し苦しい経験でございます。心底よかつたよかつたとぐんっております。吟行・法隆寺行中止なさつて賢明と存じ上げます。白金葭九月号編集もご無理の産物ではないかと思つております。みち様のご心配も大変でいらつしやったと思いますが、連鎖でご体調崩されませんようお二人様のご安泰お祈り申し上げております。私も九月は忙しい月でお彼岸の墓参もせねばならずする事多く疲れました。頑張つてさわやかな秋を待ちましょう。ごきげんよう。光成高志様みち様 長屋璃子(919)

前略 先日は手紙に書いていた法隆寺の件想定外のことでしたので白金葭編集後記にあつたように延期とすることにします。体の方が大事です。昨年六月に私が行つた手術と同じような手当てをしたようです。しばらく心も体も休みなさいということと思います。いろいろと考えていそがしくしても体がついて行けなくなることもあります。敏子さんにもあまり無理をさせぬようにお祈り致します。(920 高志敏子さんへ心よ

りお見舞い申し上げます。健三より)

白金蔭9月号再読しました。大兄の言うように「何か有」は、言い尽くしたら何も無いぞよということですね。小生は逆に曲解しておりました。ご教示有り難うございました。巨泉亡し六輔も亡し魂祭(ひろし)昭和一斤の星がぞくぞくとあの世へ旅立っています。心筋梗塞で入院との由どうぞお大事にしてください。小生も甲状腺の癌という爆弾を抱えていますので、歳も歳ですのでもう秒読み段階と思っています。二十代に結核で死ぬと言われていたので組板の鯉の心境です。それではお大事に。(流灯の傾くは黄泉比良坂の)

(926 平野ひろし)

前略 其後いかがお過ごしでしょうか。賢治雑感を同封しました。適当に【順番なども】処理して頂ければ幸甚です。十月の兼題は行秋！早、秋も終るのかとびつくりしました。不安定な陽気です。十分健康にご留意を

(八月二十八日 昭七)

お便りと近頃見かけない珍しい「じゅず玉」きれいな実と葉つきのまでお送り下さいましてありがとうございます。町中に住んでいても「原ツバ」はどこにもありません。秋らしい野草もいろいろありましたつけ、人口が増え開発が進めば、動植物の命は無くなり淋しいことです。この夏、守宮、二度見ました。沢山居たとか

げや梅雨茸も見られなくなり、美しい青色のつゆ草も近くには見えなくなり、ましてや、じゅず玉なんてなつかしき一杯ありがとうございました。宗匠のご病中多忙の中私ごとにお氣使い、嬉しく嬉しく御礼申し上げます。検査○印をお祈りしております。買い集めた山ほどのエハガキレターペーパーお代わりに使うつもりお許し下さい。ごきげんよう。光みち様

(10・1 長屋璃子)

仙厓展始まったようですね。これは何年も前に出光美術館で買った絵ハガキのコピーです。云い得て妙と申すべきか。(老人六哥仙 志わかよるほくろが出来る腰まかる頭かはけるひけ白くなる (以下略))

「日本野鳥の会」会長柳生博 かんむりうみすずめは絶滅危惧種で保護されています。かるがも親子 山野吟行の折のお帽子にでもいかが？ (これはバッジのコメント。7匹の猫の絵のメモ紙に包まれて)

前略 その後体調如何ですか。10/4にもう一回ステント挿入手術とのことでしたが上手く終わるよう祈りながら郵便で今書いています。私も二回に分けて挿入手術をしました。手当てが早かったので大丈夫だと思います。広島カープ リーグ優勝記念切手同封しています。クライマックス勝って？日本ハム大谷投手との勝負が楽しみです？将来何か記念になるかとも思っ

送ります。高志敏子様へ

健三より (10.3)

(10/4に外来予約で右の手術は10/12に済みました。大分楽になったので治ったらしいです。<sup>11/8</sup>に外来で症状を報告します。カーブ優勝はうれしいですが、私はS・50年の秋が一番エキサイティングでした。今年は日本一になりそうです。高志手当ご終了のことと存じます。順次、調子を上げて下さい。晴天白日の下での再会を楽しみにしております。小生体重回復にこだわりましたが、何事も腹八分目が肝腎と最近悟りました。陽気不順ゆえご自愛の程を、心ばかり別送いたしました。(裏はボール・セザンヌサント・ヴィクトワール山の絵ハガキ

(10.6 飯田孝三)

来週ご治療完了予定とのこと、急がば廻れ必ずうまくいきます。果報を楽しみにしています。辛抱は一刻です。ときは秋、天高き手賀沼のほとりで会いましょう。ただし治療後一週間ばかりですから決してご無理なされませんように。十分にご体調を整えられてから秋気満喫いたしましょう。楽しみにしています。

秋高き手賀沼の湖風ひかり満つ(孝) お大事に。

(10.7 孝三)

前略十月十日体育の日突然の寒さで秋を惜しむ前に初冬になった気分でした。お体調におさわりになきよう願っております。今月は烏頭<sup>うずず</sup>海中藻<sup>みくも</sup>いくりも虚栗<sup>み</sup>しぐりとか句の中に出て来ました。前の二つは見たこと

なし、みなしぐりは落花生でも完全なものでないのは昔<sup>し</sup>しいなど云っていました。虚栗<sup>み</sup>みなしぐりお初に聞きました。私の母方は昔の江戸言葉<sup>う</sup>を使っていたようで東京人の山尾氏に聞いても知らないと言言葉もあります。伝える者のない私はその古い方言かも知れない言葉をわざと使っていこうかと思っています。みち様に花たでのタネ、バラぐ落ちています。秋海棠、今日急に衰えを見せほとゝぎす秀明菊咲はじめました。次は小菊です。光成様お大切に、みち様も仲良くご病気にならないで下さいませ。

(10.11 長屋璃子)

(虚栗は基角に「木枯よ世に拾はれぬみなし栗」(天和三年)と句を自分の連句集の序文に載せており、芭蕉が甲州より帰り跋を書いて援助している。俳壇全体が莊子にかぶれて「虚を先として実を後とす」と云う寓言俳諧が流行っていた時代。漢詩文調の句を芭蕉は弟子の基角の「みなし栗」に結構沢山載せている。先の記念号の181頁あたり。前の二つは知りません。)

(お礼) 先日久々の例会ではお世話になりました。好天に恵まれ、共々笑顔で相集い、幸先よい出だしでした。健二さんのご参加も嬉しく、先が楽しみです。冬も近づき、お互に体を大事に句に遊びましょう。

(H 28. 10. 23 飯田孝三)

前略 健二さんの参加はうれしい事です。きつと

にぎやかな会になるでしょう。賢治雜感同封しました。

よろしく願います。寒さに向かいます。健康にご留意下さい。みちさんにもよろしく。  
(1024 昭七)

光成様 誓子の本二冊おくります。ありましたら適当に処分して下さい。くれぐれも御身体を御大切にして下さい。  
(1026 小山陽也拜)

受贈誌 (H 28 年 10 月号)

電気柵囲みて真つ赤曼珠沙華 (彩 131 号) 平野ひろし

黎明の西に煌々寝待月 (〃)

秋霞ターナー調の八ヶ岳 (〃)

踊りゆく帯は喪の帯風の盆 (〃)

多羅葉に願ひをひとつ星祭 (〃)

カーテンで仕切る病室明易し (〃)

はるかなる光と陰のすすき原 (あすか 10 月号) 野木桃花

雪溪にふはりと降りて鴉爪 (〃)

山霧やヘッドライトがすれ違ふ (東京クラブ 二月)

壁額は牧水の歌新酒酌む (〃)

霧に濡る伊香保神社の由来書き (〃)

色鳥や針孔の拒める木綿糸 (〃)

こだま

水面に雨跳ね上がる梅雨豪雨 (彩 131 号) 光成高志

(やまおかづひろ 吟行ノート H 28・10・04)

名石にあたりし木の実拾ひけり

体育の日パチンコ店に人並ぶ

秋茄子きのふと違ふ皿に盛る

俳諧の道は遙かや萩こぼる

賢治童話「どんぐりと山猫」

武者昭七

ある土曜日の夕方おかしなはがきが山猫から一郎のもとに届いた。めんどろな裁判があるから手伝つてくれというのだ。むじやきな一郎は喜んでうちじゅうをとびはねる。翌日、一郎は谷川に沿った道をなんども行き来した末に迎えに来た馬車別当にであう。じつは手紙の書き手は別当で、文章も文字もへたなのをしきりに気にするのを一郎はおおげさにほめそやす。山猫はこの三日のあいだどんぐりたち相手の裁判に手を焼いて一郎に知恵をかりたいのである。やがてどんぐりは一郎たちの足元の草の間から続々と湧いて来る。みんな赤いズボンをはいてピカピカ光る金色だ。集まった三百でもきかないどんぐりたちがわあわあ一斉に声をあげる。やってきたどんぐりたちのなかでどんなのが一番偉いか決めてほしいというのである。頭のとがつているのが一番という者、いや、円いのが、というもの、からだの大きいのがという者、いや背のたかい

ものというもの。山猫がついに音を上げて一郎に判断をもとめる。一郎は次のように言い渡す「このなかでいちばんばかで、めちやくちゃで、まるでなっていないようなのがいちばんえらい」それを聞いたどんぐりたちは「しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、かたまつてしまいました」というわけだ。

それを見た山猫は問題解決とばかり喜んで策いつぱいのピカピカ光る金色のどんぐりをお札にくれる。しかし、どんぐりたちの重い沈黙は納得のしるしだったろうか。そうではあるまい。みんな意外な判決に声を失ったのだ。一郎は問題をすりかえたのだ。どんぐりたちのしきりに求めたものは誰の目にもそれと知れる生活に即した日常的な価値基準の受け入れであり輝かしい個性の主張だ。なのに一郎は人格のありよう、こころのありようを持ち出した。目に見え手に取ることのできる実利的価値を近代的価値とすれば、いまだどんぐりたちの求めているものはそれであり、ピカピカの服が示す個性の輝きである。一郎の持ち出した価値はそれとは対照的で、どんぐりたちの感覚からはほど遠いもの、あまりに反常識的なありようだ。それどころか一郎が家に戻った時、お札のどんぐりは金色の光を失った茶色のどんぐりと化し、ヤマネコの姿も消えていた。一郎の判決は宙にういたままだ。一郎の判決

はどんぐりたちに拒否されたということだ。「山ねこ 押」というはがきはもうこなかったと語り手はいう。一郎はどんぐりたちの仲間ではなかった。

#### 追記

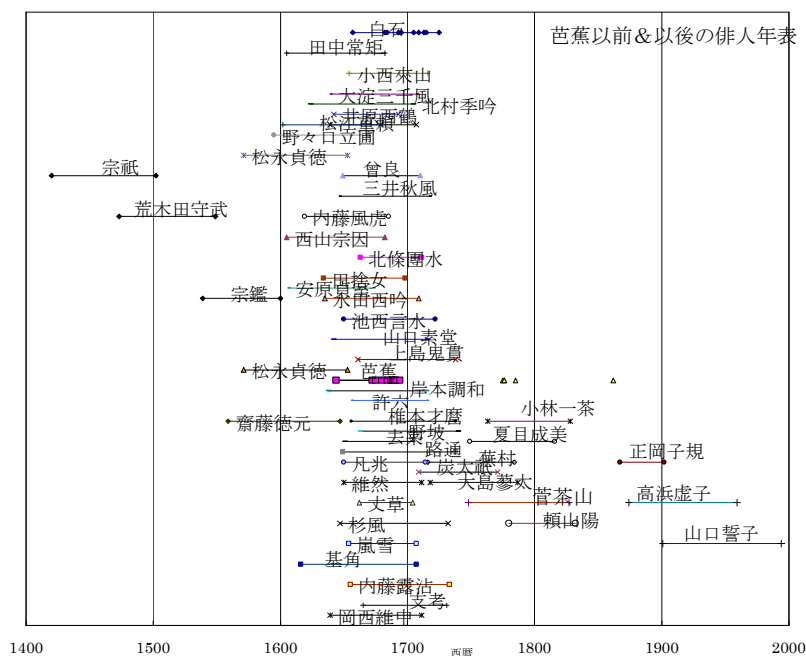
山猫の「とびどぐもたないでくさい」という念押しは面白い。近代的な殺人具である猟銃の拒絶だ。「注文の多い料理店」の二人の紳士を思い浮かべる。かれらに突きつけられた注文の第一は武装解除だった。山猫は修羅の嫌いな平和主義者なのだ。

裁判の場にどんぐりたちが登場するその仕方も面白い。足元の草の中から黄金色のまるいものが赤いズボンをはいてぴかぴか光りながらぞくぞくと湧いて来るという威勢の良さだ。釈迦の説法を聞くために無数の菩薩たちが地面から湧いて出たという話を思い出す。

裁判のお札にといつて山猫は乞われるままに一郎に黄金きんのどんぐりを一升ほど贈るけれど「一升到りなければめっきのどんぐりもまげてこい」と命令する。「早くはやく」とせかせるところが問題なのだけれど（一郎に見破られないためか）「めっきのどんぐり」とはなんだろう。「黄金のどんぐり」とはおよそ反対のしなびきった「しいな」のようなどんぐりだろうか。とにかくはやくお札をもたせて一郎を追い返そうという意図はみえみえではないか。一日の体験から一郎はな

にを学んだらうか。

(二〇一六・九・十五)



芭蕉のかるみ以後 (30)

光成高志

芭蕉を中心に据えてそれ以前それ以後の俳人年表を上  
の図に示した。これは近世俳句集(日本古典文学大系92  
一九七八)から筆者が作者を選んで作成した。芭蕉の生  
涯は短い。それをものともせず、蕉風という「誠の俳  
諧」を打ち立てたこと、俳諧という形式の文学にとつ  
て可能なあらゆる表現形式を体験しつくした芭蕉の生  
涯は俳諧史のすべてである。芭蕉以後も時代時代によ  
つてさまざまな俳諧の風潮が現れるがそれらは皆芭蕉  
が経験したものが原型をなしている。私はその完成の  
域は「かるみ」という芸境だと思ふ。明治になって子  
規が写生という句法を唱えたことにより俳句が誰でも  
作り易く庶民的文芸として定着して現代に及んでいる。  
図の右下に山口誓子が見えるが、これは私が初学の頃、  
聲咳に接した俳人である。その頃は誓子俳句をただ  
ぐ真似してその選に入ることを目指していた。誓子  
先生は『自然の物を写生し、物と物との結合を把握し、  
その物を客観描写によって、季節感を詠う。これが、  
芭蕉から現代に伝わった正統俳句である。』と言われた。  
句作りの方法は写生構成のメカニズムといわれる。メ  
カニズムは構造力学で塑性ヒンジができることを云う  
ので、私には親しみがあつた。しかしここでいうメカ



ニズムはそのような科学的な意味ではない。誓子先生の我が主張・我が俳論<sup>①</sup>の最後に図式で書かれてある正↓反↑合の句作の方法論を指す言葉である。正は一つの物、反は飛躍した他の物、その二つの物がそのままとして統一されているような句がメカニズムがあるという。そこを強調するのが誓子先生の俳論の核である。それは芭蕉から出て、蕪村も云っている、子規も虚子も至り着いたところであると書かれてある。芭蕉以来、現代に通じている俳句の道であると。鷗外流である。そこに引用されている芸術家は、芭蕉を始め、本居宣長、蕪村、道元、斎藤茂吉、平福百穂、ロダン、虚子、ドナルド・キーンである。子規については、一章を設けて論じられてある。写生・配合、客観描写は芭蕉から受け継いだものとして、虚子、碧梧桐の事まで述べられている。虚子は写生と客観描写を結びつけて、花鳥諷詠、客観写生の二つをモットーとした。碧梧桐は配合と写生を結びつけた。配合も新しい配合を生れさせなければならぬ。そのために絶えず自然に還れと言っている。自然に還れというのは、自然を直接に写生せよということである。乾坤の変は風雅のたねなり、新しきは俳句の花、日々新たに、新は深なり、些事に深い意味を見出す、これらの言葉は皆、

芭蕉の主張から出て子規に伝わり、虚子と碧梧桐によって受け継がれ、誓子に受け継がれ、現代の多くの俳人が受け継いで作句していると思う。芭蕉の継承はどのようにして現代まで及んでいるが、芭蕉没後の江戸時代は、芭蕉一代の内に俳諧史の道をすべて通過していたのだから、継承の目的が分裂して、芭蕉の全人格を対象としてその心を求める形に重点が置かれなかった。芭蕉は貞門風、談林風を経て蕉風に至り軽みに達したが、軽みは高く評価されなかった。蕉風は「さび」において成ったと言わざるをえない。芭蕉伝書の刊行が幕末まで続きそれらが戦前まで潜行し続けた。芭蕉の辿った道をなぞって通る俳諧史は、作品の発掘・注釈・句碑建立・追善会に終始した感がある。芭蕉が神になるのは百回忌の寛政五年のことであり、天保14年の百五十回忌には大明神になる。これはみな後世の人々の盲信である。継承は自ら主体的にならなければない。没後二百年頃の子規において神の座から引き下ろされたが、先述のように、子規虚子誓子と芭蕉伝書の言葉を現代的に各人の言葉にとらえ直して継承しているのではなからうか。しかしながら、蕉風の帰着点が軽みであるとして再評価する動きがみられないのは、連句において唱えられたからだとばかり言えないと思う。芭蕉の通って来た道を、精神の道を辿って、軽

みの境地を想像してみる他は新しい現代的芸境は生れて来ないと思う。その際、近世初期の学問はどのようになされ、その中で俳諧がどのように芸術として独立したのかを考えてみるものが重要である。芭蕉は莊子によって開眼したと既述（記念合同句集二〇一六）したが、当時の儒学・禅学に影響されているに違いなく広い視野で芭蕉を見ていけばその一生が必然的に思えてくる筈だ。現代はなんでも科学的思考によって世の中を見ようとする。思うて思うて直感的に達する精神に思いを致さない現代の風潮が芭蕉において見えていたものが、ここ三百年の間に見えなくなってしまったのではなからうか。

【参考文献】(一)日本古典文学大系 92 近世俳句俳文集 阿部喜三

男、麻生磯次 岩波書店 一九七八

(二)山口誓子読本 山口誓子 本阿弥書店 一九八五

(三)山口誓子と古典 神谷かをる 明治書院 平成元年

## 我孫子日記

9/16	休会・発行
9/21	SOA
9/28	SOA
9/29	特定検診
10/4	* 外来受診
10/5	SOA
10/11~12	*2 カテーテル 検査・治療
10/13	退院
10/21	例会

\* 谷津を抜け開けて尾花北総線

\*2 落花生塚ブルーシートの帽かぶり

行く秋や心にカテーテルまた通す

## 編集後記

源氏物語のご縁にて磯目健二さんが句友になられました。農民文学にて活躍されておられる文士であります。たまたま私は菅茶山の農村詩を紹介しようとしている時でしたのでこれも不思議なご縁と思います。芭蕉の軽み以後を探ってゐて、漢詩に至り、菅茶山から鷗外の伊澤蘭軒を再読、富士川英郎の読書好日にまた触れる。今回の事を想定して買っていたわけではないのに、手許に捨てずに持っていた本が役立つ。茶山の綿弓響く詩などを讀むと、綿栽培から綿を作り綿糸を絞り染めて河原に干していた備後の風景がよみがえる。先祖の魂が導いているのだろうか。そんなことを思いつつ後記を書いた。

それと私の狭心症の治療についてご心配をお掛けした上、沢山の便りを頂きました。心より感謝申し上げます。此れからは、もう年取った体だとよくく己を自覚して心と均衡を保つように生活していこうと思っています。そのことを痛感致しました。孝三さんの悟りのように何事も腹八分目が肝腎々々です。

高志

” ”

お知らせ

去る六月二十三日に増田悦子さんが御逝去なされました。遅くなりましたが来月の69号は悦子さんの追悼号に致したく、各人三句以上の追悼句を御寄せ下さるようお願い申し上げます。できれば思い出などの文章もお待ちしています。例会の後までに高志にお渡し下さい。

以上

追伸…陽也さんから誓子の本が二冊届いた。「俳句添削教室」(玉川大学出版部一九八六)と「誓子俳話」(東京美術 昭和四十七年)である。大変ありがたく頂きました。前者は故圓子さんがよく読まれていた本で私も何回も読んだ親しい本です。後者は、持っていませんでした。今は大変貴重な本になっていると思います。澄雄俳話というのを二冊もって昔読みましたが、なにか物足りなく思った覚えがあります。復習の積りで読みます。新しいことがあつたら本誌で紹介致します。

白金葭 10月号 (第68号) 平成28年10月発行  
 編集・発行人 光成高志…(〇四―七一八七一―一〇六八)  
 発行所 270・1119 我孫子市南新木 2・14・17  
 表紙の題字…加納綾女。写真…10月23日の白金葭